

## ルターとマリア

多田 哲

### 一 当時のマリア崇敬

ルターとマリアについて考える前に、当時のマリア崇敬がどのようなものであったか確認しておきましょう。マリア崇敬は現代のローマ・カトリック教会でも行われていますが、当時と現代とは内容がかなり異なります。十四世紀、十五世紀ごろにはキリストよりも聖母マリアへの崇敬が人々に広まっていました。それは、キリストと人とを仲介する存在として重要な役割をマリアが担っていたからです。

そもそも、人は罪によって神から断絶されてしまっており、自らの力で神とつながることはできなくなってしまうので、イエス・キリストの十字架と復活とによって神と人との間を取り持つてもらおうというのが基本的な

考え方です。しかし、当時の人々にとってキリストは最後の審判に再びやって来て私たちを裁く存在として恐れられていました。この考え方には、善人は天国へ行き、悪人は地獄へ行くという、中世の素朴な他界観が影響しています。多くの人は天国に行けるほど善人とは言えず、地獄へ行くほどの悪人でもないという、いわば、どっちでもない「普通」の人間だと自らのことを考えていました。その人たちは死後どこへ行くのかというと、煉獄という天国と地獄との中間の場所に行き、そこで罪の償いを済ませたら天国に行けるとされてきました。煉獄は中間地点と言っても罪の償いのために様々な行いをしなければならず、決して行きたい場所ではありません。そのため、キリストは私たちの罪を示して、その償いがまだ十分でないことを指摘し、私たちを煉獄へ導く恐ろしい存在のようにも受け止められていたのです。そこで、頼りにされたのが聖母マリアでした。

聖母マリアは慈愛に満ち、全てを包み込む愛を持った母として、私たちをキリストに対してとりなしてくる存在でした。当時はキリストではなく、聖母マリアに祈ることが習慣化していたのです。本来、神と人との間を取り持つのはキリストの役割ですが、その下請けとして聖母マリアが位置付けられ、聖母マリアを介さなければキリストにつながるできないような階層構造ができてしまいました。他にも聖人たちや高位聖職者たちが間に介在することで、教会の位階や権威を強固なものとしていきました。人々はマリアにとりなしを願う時にマリア像に接吻し、伏して祈っていました。このようなマリアの神格化ともいうべき状態を四位一体と揶揄する人もいましたが、多くの人たちは聖母マリアに慈悲深い母としての役割を期待し、広くマリア崇敬は浸透していました。

## 二 ルターのマリア崇敬とマリア論

ルターも修道士時代、アウグスチノ会の儀礼として毎日マリア像に対して「めでたし天の元后」を唱えていましたし、護身用の短剣で誤って太腿を刺してしまった時にルターは「ああ、マリア様、助けてください！」（『卓上語録』一五〇三年 [WA TR I, Nr. 119, 46]）と思わず叫びました。咄嗟にマリアに対する祈りの言葉が出てくるほど、人々にとってマリア崇敬が身近であったことが窺えます。

また、「彼女が生き始めたその最初の瞬間から彼女には何の罪も無かった」（『ペトルス・ロンバルドウス命題集註解』一五一〇／一一年 [WA IX, 74]）と書き記すなど、人々の母として罪をとりなすマリアに対する純潔さへの期待が表されています。ただし、マリアの無原罪懐胎がローマ・カトリック教会の公式教義になるのは一八五四年のことで、当時の習慣的な捉え方を反映したに過ぎないかもしれません。

しかし、教会による贖宥状の販売に疑問を感じ、『九五箇条の提題』（一五一七年）で贖宥状の効力について問題提起したルターは、それを契機としてキリストの恵みを再発見します。やがて、ルターのマリアに対する態度は祈願から賛美へと変わっていきます。ルターは一五三二年のクリスマスの説教の中で「神の母であることからマリアはすべての被造物を越えた価値をもっている。……マリアが賛美に価するものであり、決してじゅうぶん

に賛美され榮譽を与えられ過ぎることがないことは確かである。その榮譽はそのように高く輝かしく、地上のあ

らゆる女性の上にある、神の子の母なのである。我々はこの母を誉めたたえなければならぬが、彼女が生んだ御子を我々の目と心から見失うことのないようにしなければならぬ」(『イザヤ書九章による降誕祭の説教』一五三二年 [E. VI, 48-51]) と語っています。マリアが賛美されるのは神の子の母であるからで、崇敬の中心は神の子イエス・キリストであると表明しています。ルターにとってマリアはとりなしを祈る対象ではなく、神の恵みを証しする信仰の先達として捉え直されていくのです。キリストの十字架を覆い隠すマリアではなく、キリストの十字架を証しするマリアです。

この捉え直しは、他の聖人崇敬にも及びます。ルターは「聖人の祝日は、日曜日の福音書朗読の後に例話として挿入される良いキリスト教的な説話は別として、廃するべきだろう。しかし、マリアの清めの祝日(主の奉獻日)と受胎告知の祝日を私は残した。被昇天の祝日と誕生の祝日もまだしばらくは残しておかなければならない。私は洗礼者ヨハネの祝日と聖パウロの祝日も残した。他の使徒たちは残していないが、日曜日に祝うこともできるし、もし特定の日に祝いたいというならばそうすることもできる」(『教区の礼拝規定』一五三三年 [WA XII, 37]) と述べ、聖人崇敬を信仰の先達の記念へと捉え直しました。一五二五年に宗教改革急進派のカルシュタットに送った論争文書には「聖像破壊者たちといえども、十字架像や、あるいはマリアの像を私に許してくれなければならないであろう。……私がそれらを拝むことなく、ただ記念として持つ限りにおいては、モーセの極めて厳しい律法に従ったとしても、これを携帯したり眺めたりすることは許してくれなければならないであろう」(『天来の預言者らを駁す』一五二五年 [WA XVIII, 70]) と書いています。記念とは、信仰の先達の証しを思い起こし、励まされることです。ルーテル教会ではプロテスタントに珍しく洗礼名を付ける習慣があります

が、これも守護聖人という捉え方ではなく、信仰の先達の証しを記念し、信仰生活の模範として自らの励みにするという捉え方で、崇敬とは異なります。

こうして、マリアはルターにとつて代弁者から共同祈願者になりました。ルターは「私はマリアを代弁者としては持ちたくないが、とりなしを祈る者としてなら持ちたい」と一五二一年のマリアの誕生日の説教で語っています。代弁者とは、私たちに代わってキリストに罪のとりなしを祈ってくれる者、キリストと人とを仲介する者のことで、マリアの存在が救いに不可欠であるかのような誤解を人々に与える捉え方です。これではキリストの十字架を覆い隠してしまいます。それに対し、共に祈る者とは隣人のために心を合わせてくれる会衆の一人であり、同じ神の民、教会です。マリアは、私たちが隣人のためにとりなしを祈るのと同じように、私たちのためにとりなしを祈ってくれる同じ信徒なのです。

ルーテル教会の礼拝式文「聖餐の序詞」に「今、地上のすべての教会は、あなたの御名をあがめ、永遠の賛美を天の御使いと聖徒たちと共に、声を合わせて歌います」という言葉がありますが、天に召された者も、地上に生きる者も、すべての聖徒たち、特別な聖人と呼ばれる人だけでなく、すべての信徒たちが共に祈るのです。

### 三 その後のルーテル教会のマリア論

宗教改革の中心点は「キリストのみ」に集約されます。ルーテル教会の信条を記した『一致信条書』でマリア

が引き合いに出されるのはキリスト論において、マリア論そのものには言及されていません。プロテスタントが「キリストのみ」と主張したのは、キリストの十字架を明示し、救いにとって不可欠なものとそうでないものを明確に区別するためでしたが、それを強調するあまりに、救いに不可欠でない諸事項（アディアフォラ）を軽視してしまっていたのかもしれませんが。アディアフォラは決して「どうでもいいこと」ではなく、未決事項として私たちに委ねられていることです。マリアの扱いも私たちにとって軽視して良いものではないはずですが、いつしかプロテスタントにおいてはマリアが蚊帳の外に置かれてしまい、忘れられた存在となっていったのです。

二〇世紀の神学者パウル・テイリツヒは、プロテスタントがマリアを忘却したことで女性的表象を持たなくなり、そのために男性中心の価値観を擁護してきたのではないかと指摘しています。ローマ・カトリック教会のようにはマリアを聖母として神聖化すると同じように、プロテスタントではマリアを卑しい身分の女性として取るに足らない存在のように扱い、どちらにしても信徒であり信仰の証人であるマリアという一人の人格を持った女性として見なしてこなかった点は現代において反省すべきではないでしょうか。

### 【補記】教会論とマリア

シンポジウム中では時間の都合上、また、論点の散逸を避けるために取り上げませんでした。プロテスタントは一人の人格を持った女性としてのマリアを蚊帳の外に置いてきてしまったものの、神の言葉キリストを生ん

だ存在、神の母としての役割をマリア個人ではなく、それを教会に当てはめて捉えてきました。ルターは「我々は皆、体の誕生は異なるとしても、洗礼においては乙女マリアから、すなわち教会からの初子である。教会は霊において純粹な乙女であり、すなわち教会は純粹な神の言葉を持っているのであり、それによって懐妊するのである。こうして我々は主なる神の義なる初子であり、私もあなたも皆、義なのである。」(『主の奉獻日の説教』一五三四年 [WAXXXVII, 287-288])と語っています。また、「罪の赦し、神の憐れみのすべての宝は、教会がキリストの花嫁と呼ばれることとこの上なく素晴らしく描かれ、示されている。この原型から、キリストのものをすべて花嫁が持っているということである。それは、すべての永遠のもの、義、知、力、真理、命、喜びである。それゆえ、教会はすべての憐れみ、命、救いの女主人であり女王である。そのようにマリアについて歌われているのである。」(『第二回詩編講義』一五三三年 [WAXL<II>, 557-558])とも語っています。教会をマリアになぞらえること自体は中世からありましたし、キリストの花嫁という捉え方もクレルボーのベナルドゥスに代表され、ルターも『キリスト者の自由』などで言及しています。「キリストのものをすべて花嫁が持っている」というのは、いわゆる「喜ばしい交換」と呼ばれ、ルターは『キリスト者の自由』の中で、「キリストがわたしのためになりましたもうたように、わたしもまたわたしの隣人のために一人のキリストとなろう」と述べています。「キリスト者になろう」とか「キリストのようになろう」とかではなく、「キリストになろう」と述べているのです。それは「あなたも新婦をその新郎にめ合わすようにキリストと一体ならしめ、あらゆるものが共有され、キリストの所有したもうものは信仰あるたましいの所有となり、たましいの所有するものがキリストのものとなる」ことなのです。つまり、キリストのものである愛、赦し、命が私たちのものになり、私たちのものである

罪、不義、死がキリストのものになったのです。これが喜ばしい交換です。マリアを、このキリストの信仰を体現し、証しする人としてルターは賛美するのです。ルターは「マリアが神の母であるというこの信仰箇条は初めから教会の中にあり、福音すなわち聖書の中にあつたのである」(『公会議と教会について』一五三九年「WARTBURG」)とも書き記しています。私たちは自分たちの信仰や教会について考える時、神の母であり、キリストの証人であり、信徒であるマリアについて改めて考えていくことは大事なことでないでしょうか。